報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと―ひめじじょうあとだい322じはっくつちょうさほうこくしょ―
書名	姫路城城下町跡―姫路城跡第322次発掘調査報告書―
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第27集
編著者名	中川　猛
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1　　TEL（079）252-3950
発行年月日	平成27年（2015年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
姫路城城下町跡（ひめじじょうじょうかまちあと）	兵庫県姫路市（ひょうごけんひめじし）西二階町（にしにかいまち）1番他	28201	020169	34°49′54″	134°41′28″	2014.5.8 ～ 2014.5.10	22㎡	建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
姫路城城下町跡	集落跡	江戸時代	溝、土坑	陶磁器	20140073

―例　言―

1．本書は、兵庫県姫路市西二階町1番・2番・3番・4番他で実施した姫路城城下町跡（遺跡番号：020169）の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は龍田紡績株式会社からの委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。
3．確認調査（調査番号：20140009）は姫路市埋蔵文化財センター　黒田祐介が、本発掘調査（調査番号:20140073）は同　中川猛が担当した。
4．表紙の「姫路侍屋敷図」は姫路市城郭研究室より、見開きの「西二階町絵図解読図」は姫路市史編集室より提供を受けた。
5．発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
6．土層名は、『新版標準土色帳』（1999年度版）に準拠した。
7．本書で使用した遺構は以下のように呼称した。　井戸→SE、土坑→SK
8．本書の執筆・編集は、中川がおこなった。
9．報告書に関わる図面・写真・遺物は姫路市埋蔵文化財センターで保管している。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第27集
姫路城城下町跡―姫路城跡第322次発掘調査報告書―
編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1
発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地
発 行 日　平成27年（2015年）3月31日
印刷・製本　クリヤ印刷所
〒671-1116　兵庫県姫路市広畑区正門通4丁目2-9

姫路城城下町跡

―姫路城跡第322次発掘調査報告書―

「姫路侍屋敷図」

平成26年(2014年)
姫路市教育委員会

１．調査に至る経緯

西二階町及び白銀町において駐車場の建設が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡に含まれるため、事業の実施にあたり文化財保護法第93条の届出が龍田紡績株式会社よりなされた。届出の内容に基づき、当該地における遺跡の状況を確認するため平成26年4月8日に確認調査（姫路城跡第317次）を実施した。調査の結果、計画地のうち南側の白銀町については、既存の立体駐車場により撹乱が及び、遺跡が残存する可能性は低いと判断された。北側の西二階町部分については、整地層及び遺物が確認でき遺跡が残存していると判断した。この予備調査の結果を基に事業者と協議を行い、建物基礎部分により遺跡が破壊される西二階町の22㎡について全面調査を行うことで合意に至った。調査は平成26年5月8日より着手し、5月10日に完了した。

２．調査地の歴史的環境

調査地は、姫路城外曲輪の一画にあたる西二階町に位置する。西二階町周辺は、江戸時代には西国街道や高札場、国府寺家や三木家、那波家等の本陣があり、有力町人が居住していた。寛延二年の洪水後に描かれた「姫路諸城下町絵図」の中にある西二階町絵図によれば、調査地は「下白銀町　了半持屋敷」「仁兵衛」「丁中持屋敷」に該当している。敷地のうち「仁兵衛」「了半持屋敷」については、宝暦7年以降に内海家の所有となっている。内海家は薬種店を営み富屋と号し、元禄期前後から発展しており、江戸時代後半には姫路町の大年寄を務めている。なお、内海家は土地の集約を進め、幕末期には西二階町29筆中12筆を所有していた。

３．調査の結果

基本的な層序は、盛土、江戸時代の整地層、旧耕土層を経て灰黄褐色の地山（7層）に至る。北東端の8区では地山の標高は11.5m、北西端の1区では11.1mを測る。3区と5区では黒褐色シルトの堆積が確認でき、地山はさらに落ち込んでいると考えられる。しかし、江戸時代以前の旧耕土層（2層）上面はいずれの調査区も約11.7mでほぼ一定している。建物に関係する遺構は少なく、8区で礎石を検出したのみである。調査地の大半が、整地層の半ばまで近現代の建物により影響を受けているため、本来あった礎石は既に削平されたものと考えられる。遺構は主として土坑と井戸である。全形の判明する遺構は少ないが、比較的まとまって遺物が出土した遺構について述べる。2区SK01は直径70cm以上、深さは遺構検出面から40ｃｍを測る。瀬戸染付皿、肥前磁器皿、灰釉陶器瓶・鉢、備前焼瓶、豊島石等が出土した。19世紀代に位置付けられる。その下位でSK02を検出した。直径65cmの円形を呈し、深さは遺構検出面から15cmを測る。遺物は、格子タタキのある平瓦と土師器が出土している。いずれも細片であるため詳細な時期は不明であるが、江戸時代以前の遺構である。7区SK01は調査区外へ延びるが、埋土中よりロクロ成形の土師器皿、青花、肥前陶器皿・碗、肥前磁器、瀬戸美濃焼灰釉皿等が出土した。遺物にやや時期幅はあるものの概ね17世紀後半に位置付けられる。井戸は6区で検出した。掘方は1.8m、石組みは河原石を円形に積み上げ内径で1.0mを測る。埋土は戦災焼土であり、戦前までは使用されていた。5区SK01は調査区外に延びるため判然とはしないが、掘方が垂直に1m以上掘り込まれていることから井戸の可能性が高い。時期を特定できる遺物の出土はなかった。その他、遺構に伴うものではないが、旧耕土層等から布目瓦や古代から中世にかけての須恵器の出土が認められた。

４．総括

調査地は、文献資料から町家の主が明らかな姫路城下においても数少ない場所である。調査範囲の制約から、屋敷境等の文献と対照しうる成果は得られなかったが、17世紀後半から近代にかけての遺構を確認した。また、遊離した状態ではあるが布目瓦の出土から、これまで知られている範囲よりもその分布が広がっていることが判明した。

参考文献　三浦俊明　1991　「城下町の展開」　『姫路市史』第3巻　姫路市
2009　「姫路町内の構造」『姫路市史』第4巻　姫路市

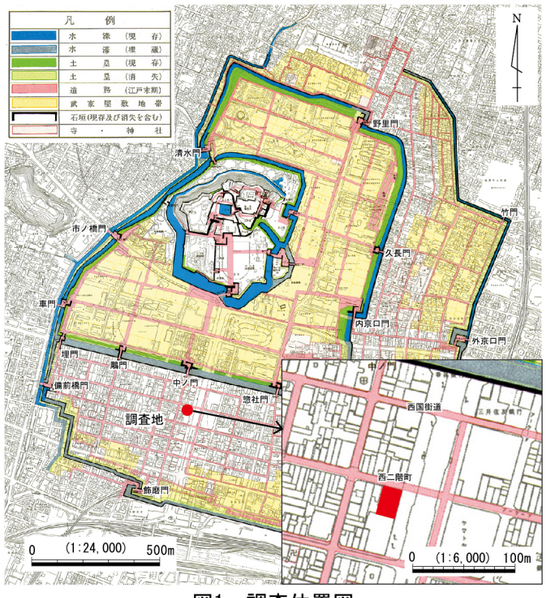
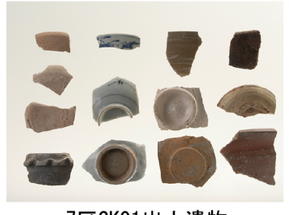


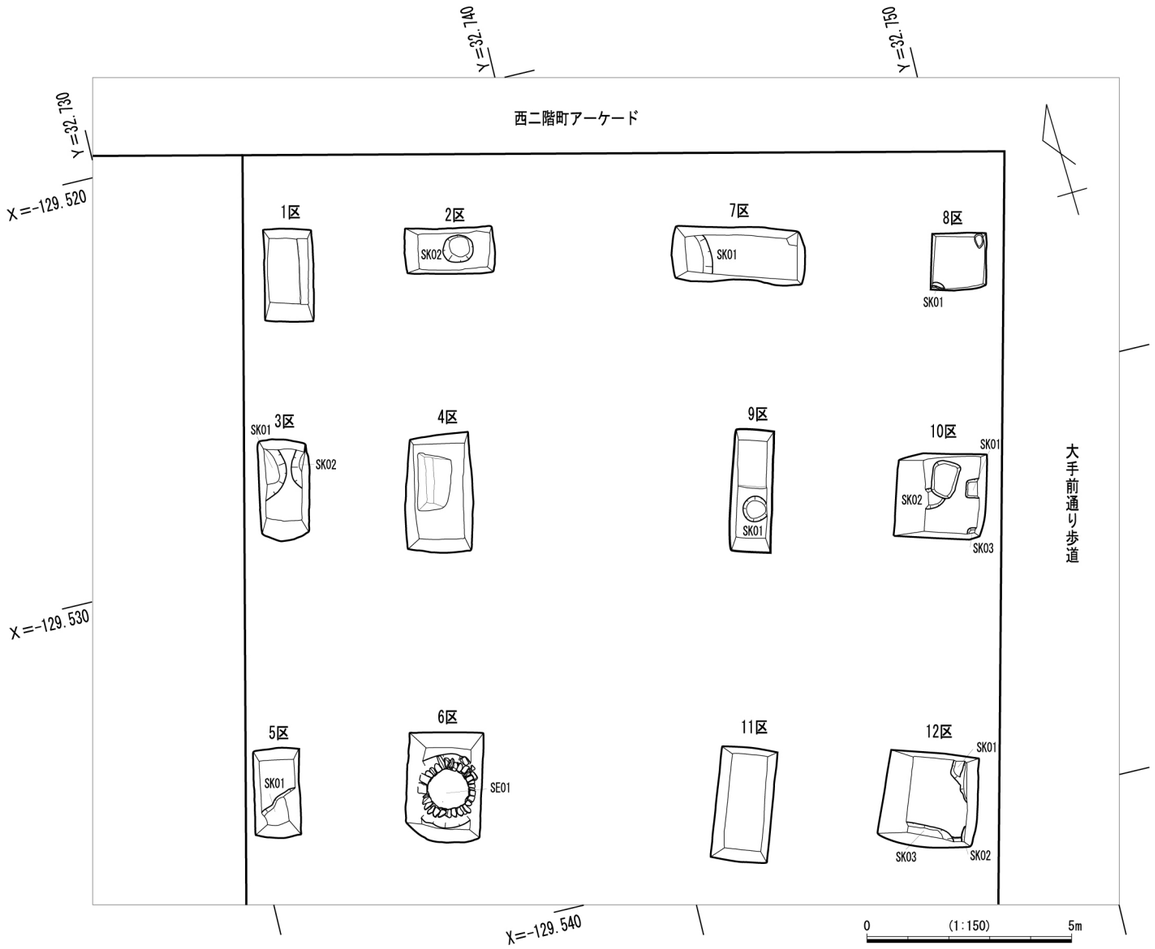
図1　調査位置図

調査区全景（南から）

西二階町絵図解読図


7区SK01出土遺物

2区SK01出土遺物



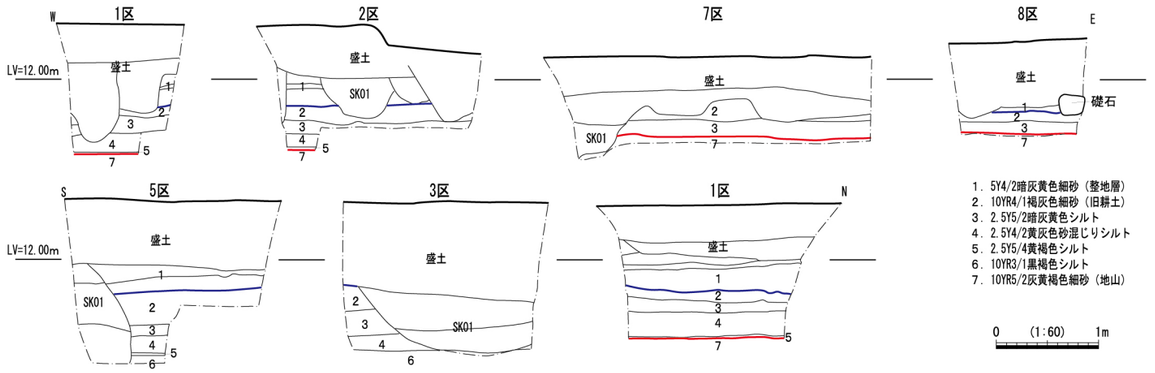


図2　調査区平・断面図

	調査区	遺構名	法　量	出土遺物	備　考
遺構一覧	2区	SK01	直径70cm以上、深さ40cm以上	瀬戸焼皿、瀬戸焼壺、備前焼瓶 丹波焼壺、陶器土瓶、具、豊島石	
		SK02	直径65cm、深さ15cm	平瓦（格子タタキ）、土師器・須恵器細片	SK01の下位、3層を掘り込む
	3区	SK01	幅1.2m以上、55cm以上	備前焼徳利、焼塩壷、平・丸瓦	
		SK02	幅90cm以上、深さ50cm以上	–	
	5区	SK01	幅70cm以上、深さ1m以上	土師器細片、瓦	掘方から井戸の可能性
	6区	SE01	直径1m、掘方1.8m	出土遺物なし、埋土は戦災焼土	河原石積み、現地表から1.5mまで調査
	7区	SK01	幅90cm以上、深さ18cm	肥前磁器碗、瀬戸美濃焼灰釉皿、肥前陶器(砂目)皿、 刷毛目唐津碗、ロクロ成形土師器皿、京焼風陶器碗	
	8区	SK01	直径15cm以上、深さ35cm以上	–	埋土小礫
		礎石	最大長35cm、高さ20cm、河原石	–	耕土上面に据付、掘方は認められない
	9区	SK01	直径60cm、深さ約12cm、断面スリ鉢状	–	
	10区	SK01	幅47cm、深さ55cm以上	–	
		SK02	幅45cm以上、深さ43cm	–	撹乱に切られる
		SK03	幅18cm以上、深さ4cm以上	–	
	12区	SK01	幅1m以上、深さ40cm以上	近世平瓦、須恵器・白磁細片	
		SK02	幅1.1m以上、深さ70cm以上（断面より）	–	
		SK03	幅40cm以上、深さ70cm以上	–	掘込み面はSK02より上部